

アカデミア メランコリア (第21回) (若手のコラム)

北海道大学北極域研究センター 漢那 直也

北大北極域研究センターの漢那と申します。東海大学の野坂さんからご紹介頂きました。本回では、学生のうちに海外へ行くメリットについて、私の体験をもとにお話します。

私はもともと沖縄出身で、琉球大学入学時まで、沖縄から外へ出たことがありませんでした。当時、琉大院への進学を考えていましたが、海外での単身バックパッカー旅行に憧れ、一念発起して休学を決意しました。当時を振り返ると、この決断が、私の今後の人生に大きな影響を与えたものでした。

とにかくお金が欲しかった私は、高時給アルバイトを始めました。ある時には、地球深部探査船「ちきゅう」の乗船アルバイト。一ヶ月間の船上生活で、研究の最前線を目の当たりにしました。またある時には、沖縄の某環境研究所の調査アルバイト。マンゲース罟の設置・回収など、現地調査を経験しました。調査後に夜のアルバイトへ直行することも多く、「漢那くん、なんだか獣(けもの)臭いよ」と叱責されたことが懐かしく思います。

半年間で貯めた100万円を握りしめ、砂漠が見たいという謎の目的で、モロッコとチュニジアへ渡航しました。これらの国ではアラビア語とベルベル語が話されますが、結局最後まで、彼らが何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。何かと失うことの方が多かった単身旅行でしたが、これらの経験は、自然と私をプラス思考、ポジティブ思考へと変えていきました。

帰国後、乗船アルバイトで経験した船上生活と、某環境研究所の現地調査で覚えた高揚感が忘れられず、船上で海の環境学を学びたいと、漠然と考えるようになりました。興奮冷めやらぬうちに、北大大学院への進学を決め、大学院ではオホーツク海の流水が関わる鉄循環の研究に取り組みました。博士課程在学時は、やりがいのある研究を続けたい気持ちとは裏腹に、自身の研究者としての素質や適性について悩む日が増えていきました。

悶々と過ごしていたD3の秋ごろ、タスマニア大学(オーストラリア)への短期留学が決まりました。悩んだ末の留学でしたが、当時を振り返ると、今後の進路を決定づけた重要な決断でした。タスマニアでの生活と、海外の博士学生や若手研究者との交流は、自身の視野がいかに狭かったかを思い知り、根拠なき(?)自信を取り戻すことに繋がりました。

留学がきっかけとなり、学位取得後すぐに、オーストラリア南極観測プログラムへの参加(Davis 観測基地への派遣)が決まりました。海水-海水間の物質循環過程(とくに鉄と炭素)の解明を目指すプロジェクトの一環で、私はリサーチアシスタントとして研究チームに加わりました。3日に1度、2m近い海水コアを1ヶ月間取り続け、基地内の実験室でサンプル処理をひたすら繰り返すことが、私の任務でした。想像以上にハードな毎日でしたが、研究チームの一員として、海外の研究者と南極観測を共有できたことは得難い経験となりました。もし留学を諦めていたら、憧れの南極観測のチャンスは巡ってきませんでした。

思い返すと、私が何か決断をするときは、決まって海外渡航がきっかけとなりました。学生のうちに海外へ行くメリットは、「この先何があるかわからないけど、自分ならやり通せる」という信念を持てることではないでしょうか。学生の皆様も、チャンスをつかんで海外へ渡航してみたいはいかがでしょうか。

